

薬師寺境内の調査

—第474次

はじめに

本調査は、昨年度より開始した薬師寺の防災設備の設置工事にともなう事前の発掘調査で、平城第474次調査にあたる。調査地は薬師寺講堂の東回廊の外側に位置し、薬師寺境内遺跡に含まれる。今回調査区周辺およびその北方では平城第69次調査（1971年）がおこなわれ、本次調査区の北方に東僧房が存在したことがあきらかになっている。しかし東僧房の南方の様子については解明されていなかった。

調査区は防災設備の設置位置に逆L字形に設定した。調査区は3ヵ所に分かれれる。それぞれA区（幅約1m、長さ約4m）、B区（幅約2m、長さ9m）、C区（コンクリートの舗装によって2ヵ所に分断される。ともに幅は2m、長さは10mと21m）で総面積は計80m²である（図242）。なお、C区のはば中央部に第69次調査区の一部がかかる。

調査期間は、A区が2010年8月16日～18日、B区が9月1日～14日、C区が10月5日～10月21日である。

基本層序

土層の基本層序はA区、B区、C区東部、C区西部で異なる。A区の土層は、上から表土、整備土（昭和）、耕作土、床土と続き、その直下で遺構面に達する。B区では表土、整備土（昭和）、耕作土、床土、青灰色粘土（整地土）、青灰褐色粘質土（整地土）と続き、その下で池の埋土に至る。C区東部では、表土、整備土（昭和）、耕作土、床土、暗灰褐色粘砂土（整地土）の順で池の埋土に至る。C区西部では、表土、整備土（昭和）、耕作土、床土、暗灰色粘土（整地土）の順である。なお今回の調査ではいずれの調査区でも地山を確認するには至らなかった。

検出遺構

遺構としては、池のほか、土坑4基、瓦土坑2基、東西溝1条、南北溝1条を検出した。池SG2953の埋土直上の整地土から12世紀の瓦器皿が出土したが、各遺構の年代については不明である。

東西溝SD2950 A・B区で検出した幅3.4m以上、深さ55cm以上の東西溝。湿地状の敷地の排水施設と考えられる。

土坑SK2952 B区で検出した幅1.2m、深さ20～25cmの

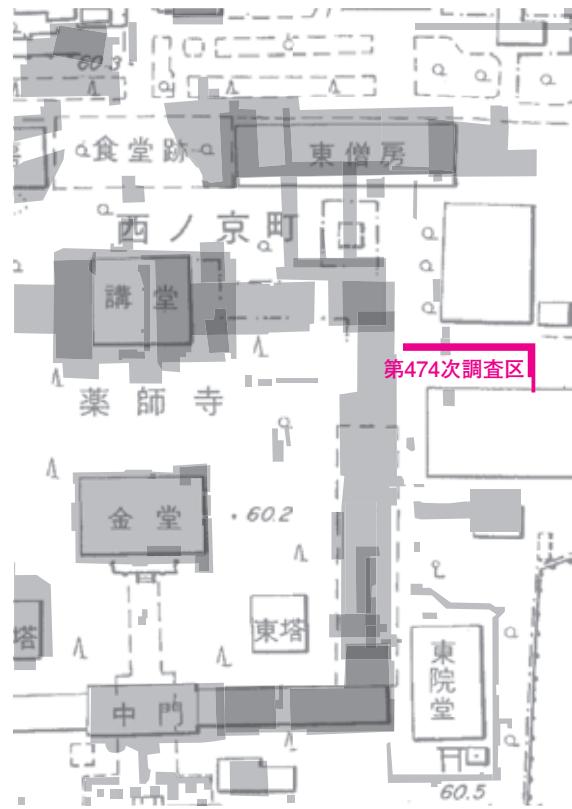


図241 第474次調査区位置図 1:2000

東西に幅の広い土坑。SD2950よりも下層の遺構。

瓦土坑SK2951 B区で検出した幅1.8m以上、深さ25cm以上の瓦を多く含む土坑。重弧文の軒平瓦が出土した。SK2952よりも下層の遺構。

南北溝SD2956 C区で検出した幅0.7m、長さ1.1m以上の南北溝。SG2953よりも新しい遺構。

土坑SK2957 C区で検出した幅0.7m、深さ10cmの土坑。SG2953よりも新しい遺構。

土坑SK2958 C区で検出した幅6m、深さ60cm以上の大規模な土坑。SG2953よりも新しい遺構。

土坑SK2954 C区で検出した幅1m以上の土坑。平安時代の瓦を含む。SG2953よりも新しい遺構。

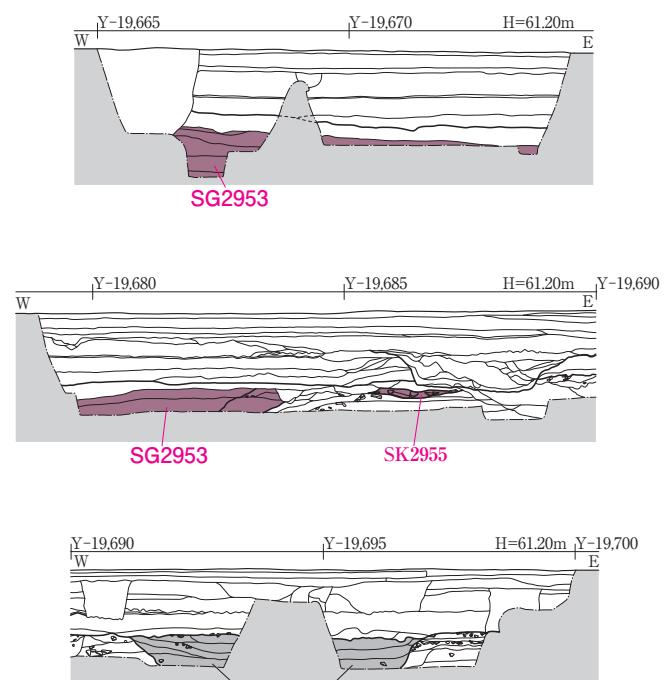
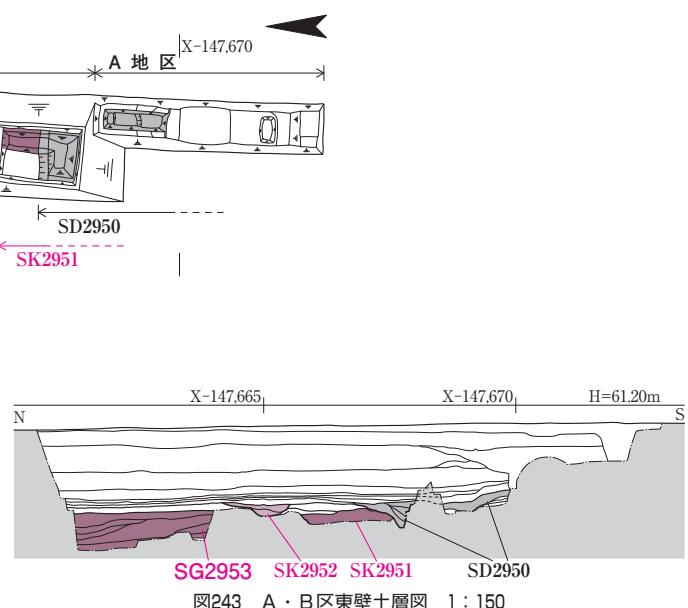
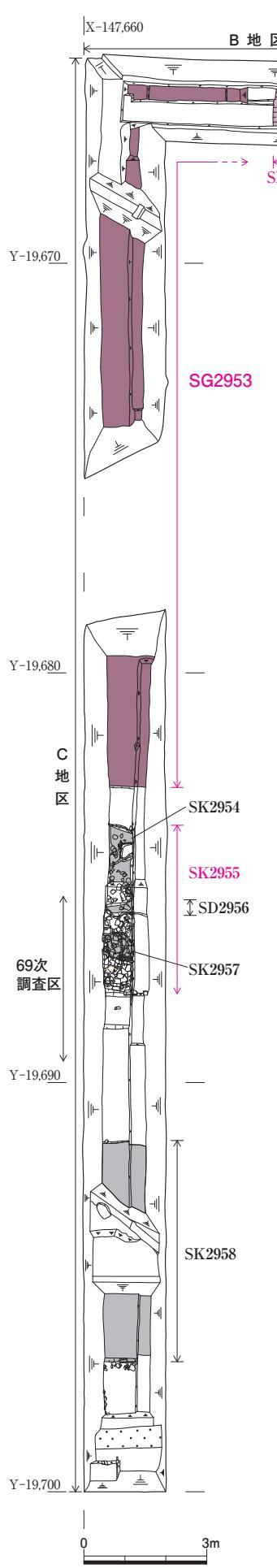
池SG2953 B・C区で検出した幅18m以上、深さ70cm以上の池。最下層は腐植土である。なお、池底は確認できなかった。C区において池の西岸を検出したが、それ以外の端部は不明である。またC区の南壁土層において2度の池の護岸改修の痕跡を確認したが、石組や堰などの護岸設備は、今回の調査区では確認できなかった。平安時代の軒丸瓦、奈良時代の軒平瓦（6697A）が出土した。SK2952よりも下層の遺構。

瓦土坑SK2955 C区で検出した幅1.9m、深さ25cmの瓦を多く含む土坑。SK2952よりも下層の遺構（図245）。

（海野 聰）

出土遺物

瓦磚類 本調査区出土の瓦磚類を表37に示した。軒瓦は



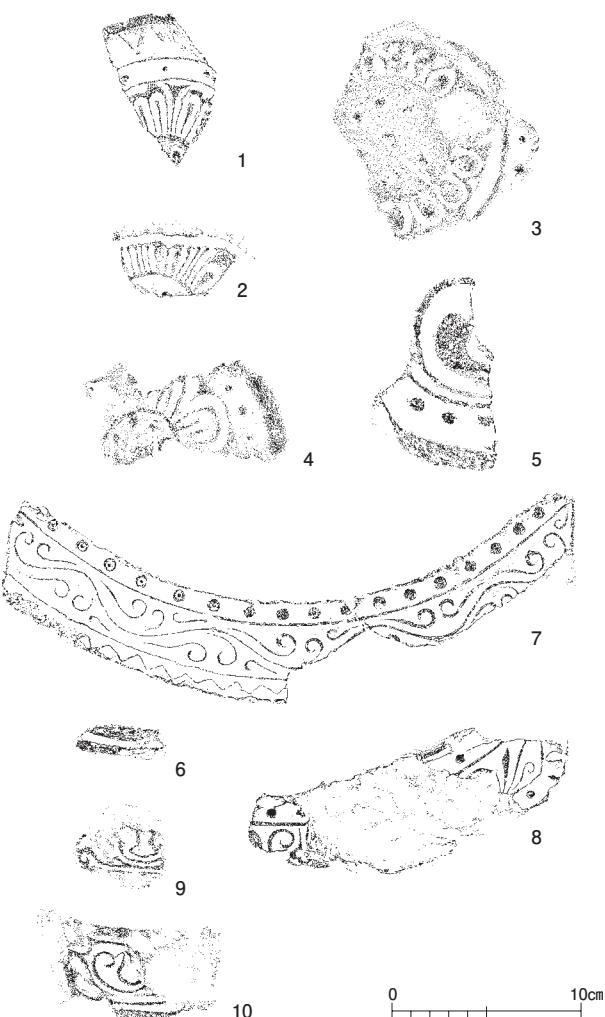


図246 第474次調査出土瓦 1:4

古代から中世におよぶ(図246)。1は6309A、2は薬師寺型式39の可能性がある破片、3は同85、4は平安時代の複弁蓮華文軒丸瓦で池SG2953出土、5は中世の巴文軒丸瓦である。6は重弧文軒平瓦で瓦土坑SK2951出土、7は平城薬師寺創建6641G。平瓦部の左狭端を焼成後に斜めに打ち欠いた隅切瓦の可能性がある。凹凸面共にヨコナデを丁寧に施し、破面には粘土板合わせ目がみられる。8は6664で、平瓦部の長さは35.0cmである。9は6697Aで池SG2953出土、10は薬師寺型式253である。

このほか、特筆すべきものとして、墨書丸瓦がある(図247)。丸瓦の凸面に九九を習書したとみられる資料で、丸瓦の広端部右半分の破片資料である。丸瓦に残る文字は右から「七九六十三」「四九卅□(六カ)」「九□□」と並ぶ。また、「四九卅□」と「九□□」の間にも残画があるが、何を書いたものか明瞭でない。「九□□」は「一九如九」の一部であると考えられるが、不明瞭。丸瓦全体を復元すると、凸面の右半分に、九の段を降順に三段×三列で書いたと推測される。丸瓦の特徴としては、凸面

表37 第474次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6309	A	1	重弧文		1	墨書丸瓦	1
葉39?		1	6641	G	1	隅切丸瓦?	1
葉85		1	6664	?	1	隅切平瓦	1
平安	2	6697	A	1		熨斗瓦	1
巴(中世)	3	葉253					
型式不明	4	型式不明					
軒丸瓦計			軒平瓦計			その他計	
丸瓦	12		平瓦	7		凝灰岩	4
重量	80.644kg		磚			レンガ	
点数	644		2			0	

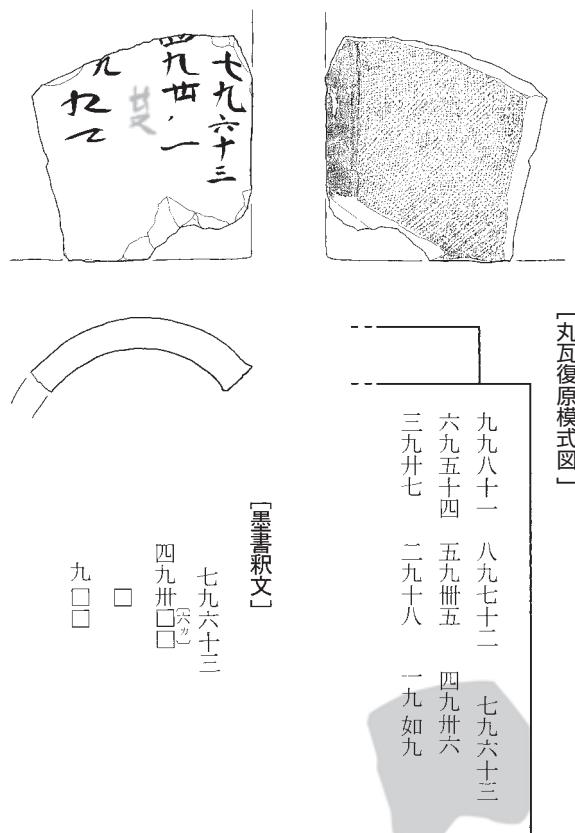


図247 第474次調査出土墨書丸瓦 1:4

は縦縄タタキを丁寧なヨコナデによって擦り消し、凹面は未調整で糸切り痕、布目痕を残す。包含層出土資料であるが、丸瓦自体の製作年代は奈良時代頃とみてよいだろう。

まとめ

今回の調査では東僧房の南方に建物の遺構は確認できなかったが、回廊の東側から約20mほどしか離れていない伽藍中心附近まで池が広がっていたということがあきらかとなった。そして2回以上の池の護岸改修がおこなわれていたことが確認できた。また、東西溝SD2950は湧水対策の設備と考えられ、池の護岸改修とあわせて、この地区において排水方法に苦慮した様子が窺えた。なお池の沿岸部には瓦土坑があり、池の周辺部を廃棄場所として利用していた可能性が考えられる。(海野)